廃棄物資源循環学会誌別刷, Vol. 28, No. 3, pp. 219-225, 2017

ストックごみの削減に向けた地域の取り組み

堀　孝弘・森下真紀

Japan Society of Material Cycles and Waste Management ■ 廃棄物資源循環学会

【特　集：高齢者のストックごみ】

ストックごみの削減に向けた地域の取り組み

堀　　孝弘*・森下真紀**

【要　旨】 京都市ごみ減量推進会議（ごみ減）では，家庭内に年々蓄積され，将来，何かのきっかけで排出される潜在的なごみを「ストックごみ」と呼んでいる。どのようなものが「ストックごみ」になり，どのような機会に排出されるのか，ごみ減会員を対象に調査し検討を進めたところ，大型の家具や家電に限らず日常的に購入する小型家電や衣料，書籍もストックごみになりうること，また排出される機会も本人死亡時等に限らず，人生のさまざまな場面で排出されることなどがわかった。さらには，「ストックごみ」排出時の適正処分やリユース可能性の追求にとどまらず，蓄積の防止を視野に入れた対策や啓発等が重要であるとの認識ももった。

本稿では，2015（平成27）年以降のごみ減の実施事業と，「できるだけ捨てない整理収納」をテーマにごみ減と協働事業に取り組んだNPO法人 暮らしデザイン研究所から，協働事業の内容と高齢期の心身変化等について報告する。

キーワード：ストックごみ，発生抑制，リユース，整理収納，高齢期の心身変化

1. 本稿の構成

本稿では，ストックごみの削減に向けた地域の取り組みについて，前半部で京都市ごみ減量推進会議（以下，ごみ減）の2015～2016（平成27～28）年度の取り組みを中心に，ごみ減事務局の堀から報告する。後半部ではごみ減と協働事業に取り組んだNPO法人 暮らしデザイン研究所 理事長 森下から，「ごみ減との協働事業と暮らしデザイン研究所の取り組み」と題して報告する。

2. 京都市ごみ減量推進会議のストックごみ削減の取り組み

2.1 遺品ごみが話題に

2.1.1 遺品ごみの話題からストックごみ対策へ

2015（平成27）年のごみ減の総会で，「遺品ごみの大量発生」が話題になった。ごみ減の多くの会員からも，使わなくなった家財道具や衣料等が家庭内に蓄積されているとの声が出た。何の対策も取られなければ，それらは年々増え，将来，何かのきっかけで大量かつ一度に排出されることになる。そのような「潜在的なごみ」をごみ減では「ストックごみ」と名づけ，有効な対策（情報提供や啓発を含む）の立案と推進について取り組むことになった。以下，2015～2016年にかけてごみ減が行ったストックごみ対策の取り組みを報告する。

2.1.2 問題の把握に努める

ごみ減には事業の実働を担う実行委員会が4つあり，うち「2R型エコタウン構築事業実行委員会（委員長 京都大学地球環境学堂 浅利美鈴氏。以下，2R実行委）」がストックごみ対策について取り組むことになった。

対策を考える前に，ストックごみの実態調査，問題の洗い出しと課題の設定が必要である。まず，実態把握のため，2015（平成27）年7月に開催した「地域ごみ減量推進会議全体会議」においてワークショップを実施し，参加者に小グループに分かれてもらい，「家の中でいつの間にかたまるもの。使わないけれど，たまるもの」および「ためない方法，たまっても，ごみにしない方法」を話し合ってもらった。

原稿受付 2017. 3. 31
* 京都市ごみ減量推進会議
** NPO法人 暮らしデザイン研究所
連絡先：〒612-0031　京都市伏見区深草池ノ内町13
京エコロジーセンター活動支援室内
京都市ごみ減量推進会議　　堀　孝弘
E-mail : takahori@citrus.ocn.ne.jp

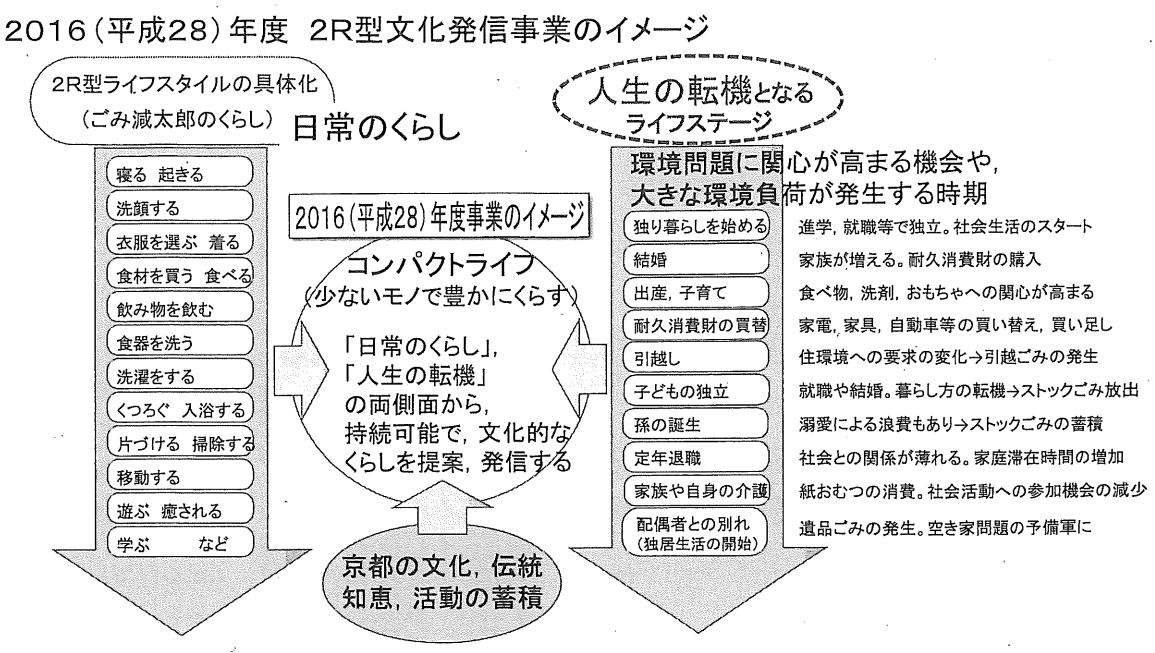

図1　2016（平成28）年度　2R型文化発信事業のイメージ（2R実行委配布資料より）

地域ごみ減量推進会議とは主に小学校区単位で地域住民によって設立されているもので，京都市の場合全学区に近い199学区（当時）で設立されていた。当日は57学区から80名の参加があり，概してご高齢の方が多かった。議論では家財道具や電化製品の他，衣料品，紙資料や書籍の蓄積をあげる意見が多く，贈答品や趣味にかかわる収集物，また配偶者が集め残している物等は廃棄の合意が取りにくいこと，さらには年を重ねるほど自力での対応が難しくなり，いざ手放さざるをえなくなったとき，どのように排出すべきか多くの人が把握していないことなどが明らかになった。

2.1.3　高齢者だけの問題ではない

これらの声も得て2R実行委で課題を検討した。その中で，排出後の適正処理は重要だが，より重要なことはストックごみの発生（以下「蓄積」を含む）抑制であり，排出時のリユース可能性の追求であることが確認された。さらに考えていくと，ストックごみが大量放出される時期は，遺品ごみといった本人死亡時に限らず，結婚，引越，子どもの独立等，さまざまな「人生の転機」をあげることができる。またストックごみの発生抑制を考える場合，日常のライフスタイルを外して考えることができないこと，さらには，不要品のリユースを追求するにしても，先にあげた「人生の転機」が訪れてからでは遅く，日常からの準備が重要であることなどが意見として出された。

このように考えていくと，対象を高齢者や遺品ごみに限る必要がなく，むしろ現役世代が共感し，参加・実践するような啓発や対策が必要であるとの認識で合意のうえ，図1で示すように，「日常の暮らし」と「人生の転機」，この両面からストックごみの発生抑制とリユース可能性を追求し，かつ京都という土地柄を考慮した事業検討を進めることになった。

2.2　2015（平成27）年度に取り組んだ事業

2.2.1　事業を企画するにあたって

事業を企画するにあたり，「ミニマムライフ」と「整理収納」が気になった。両者とも多くの関連書籍が出るなど，高い関心を集めている。ごみ減の事業目的である「ごみ減量」とも通じるものがある。

ただし，日常のライフスタイルとして「ミニマム」を求めては，実践できる人は限られる。ライフスタイル提案では，2014年度末の事業検討段階から「コンパクトライフ」という考えが上がっていた。コンパクトライフは確立された概念ではないが，それだけにこれから新たにコンセプトを作っていけるのではないかとの期待もあった。2R実行委では「限られたもので豊かに暮らす」ことを指すと捉え，さらには他者とのモノの共有やゆずりあいなど，モノを通じた他人との交流を重要な要素として位置づけ，「ミニマムライフ」との違いを明らかにしようと考えた。

「整理収納」については，それによって廃棄・放出される家財道具等の行方が気になる。廃棄への抵抗感を低くし，定期的なごみの大量廃棄を促すものになってしまっては，ごみ減の目的と違ったものになる。この点か

ら，整理収納アドバイザーやコンサルタントの中に，先にあげた「ストックごみの発生抑制や排出時のリユース可能性」について，私たちに近い問題意識をもつ人を見つけ，協働することが必要であると考えた。

2.2.2　取り組んだ事業

以下に，2015（平成27）年度の実施事業を列挙する。

・ラジオ番組「コンパクトライフで，ごみ減量」の企画と放送（KBS京都ラジオ）
・リユース情報まとめサイト「捨てずに片付く，もらい手見つける。京都の情報」の開設
・「できるだけ捨てない整理収納ワークショップ」の開催
・「できるだけ捨てない整理収納事例づくり」のモニター募集と整理収納実践

またこれらと別に，京都市内の修理屋さん情報を集めた「京のお直し屋さん情報サイト・もっぺん」の運営や，京都市役所前フリーマーケットのほぼ毎月の開催，もっぺん掲載店にフリーマーケット会場の体験コーナーに出店してもらう「もっぺん出張所」等の事業を，前年度以前から継続して実施している。

（京のお直し屋さん情報サイト・もっぺん：http：//www.moppen-kyoto.com/）

2.2.3　実施事業の概要

ラジオ番組では，京都市内でモノの共有やゆずりあい，リペア・リメイク等の実践者を毎回ゲストに招き，全8回放送した。登場したゲストはほとんどが20～40歳代で，主に京都の旧市街地に新しい息吹を感じさせる活動や暮らしがあることと，人との交流を大切にした暮らしが結果として「ごみ減量」や物の蓄積防止につながることなどが紹介された。

（放送内容：http：//kyoto-gomigen.jp/works/119.html）

リユース情報まとめサイトは，京都市内で開催されているフリーマーケットや利用可能な「ゆずります・もらいますコーナー」等の情報を集め，「捨てずに片付く，もらい手見つける。京都の情報」と題して公開した。「まとめサイト」を利用したことで費用ゼロにて開設できた。

（捨てずに片付く，もらい手見つける。京都の情報：https：//matome.naver.jp/odai/2144256306166264001）

「できるだけ捨てない整理収納ワークショップ（以下，ワークショップ）」と「できるだけ捨てない整理収納事例づくり（以下，事例づくり）」は，整理収納の考えに先にあげた「ストックごみの発生抑制や排出時のリユース可能性」，いわゆる2Rの発想を盛り込んだ市民向け事業である。これらの事業は，整理収納コンサルタントでNPO法人 暮らしデザイン研究所理事長の森下真紀氏の協力を得て実施した。

前者のワークショップは，「整理編」「収納編」「衣料編」の3回を開催した。後者の「事例づくり」は，実際にこの発想で自宅を整理し，不要品のリユース可能性をモニターとともに追求するというものである。その経験をまとめ，ストックごみの蓄積に悩む人向けの情報として発信することを意図した。それぞれ，詳細については後の森下氏の記事およびごみ減ウェブサイトの報告記事を参照してもらいたい。

（ワークショップ報告記事：http：//kyoto-gomigen.jp/works/121.html）
（事例づくり報告記事：http：//kyoto-gomigen.jp/works/152.html）

2.3　2016（平成28）年度に取り組んだ事業

2.3.1　2015年度から引き継いだ事業

2015（平成27）年度に開催したワークショップは各回盛況となったが，対象が一般市民の場合，参加者の予備知識や関心はさまざまであり，内容は広く浅くならざるをえない。また，参加者が学び得た情報が活用される場も限られる。「できるだけ捨てない整理収納」の考えを広めるには，個人や企業に対するアドバイスやコンサルティングを事業として行っている整理収納アドバイザー等有資格者を対象とした講座等を実施し，彼らを通じた普及が有効であるとの認識を関係者間で共有した。

2016（平成28）年度は整理収納アドバイザーに向けた講座等の開催に向けて，どのようなニーズがあり，必要な情報が何か，NPO法人 暮らしデザイン研究所とごみ減事務局で検討を進め，数人の整理収納アドバイザーに参加してもらい試験的な講座を開催した（2017（平成29）年2月）。そこで得た反応等をもとに，2017（平成29）年度以降の開催に向け準備を進めている。

2.3.2　ストックごみに関する事業への助成

前述のようにごみ減には4つの実行委員会があり，その中のごみ減量事業化実行委員会が実施する事業に「市民等の提案によるごみ減量モデル実施事業」がある。これは京都市内で活動する市民団体等のごみ減量に寄与する活動に事業費助成をするもので，毎年10件程度の提案を採択している。

本稿のテーマであるストックごみに関する採択事業として，2016（平成28）年度NPO法人 コンシューマーズ京都が提案した「2Rで，老いる前の物の整理を」がある。おもな活動としては，同年9月に開催されたフォーラムがある。フォーラムでは遺品整理の現場報告や，年齢を重ねるごとに低下する認知能力や体力等，専門家による調査報告，不要品のゆずりあいイベントの実践報告

の他，廃棄物処理業者を選択する目安等が紹介された。

このフォーラムには100名以上の参加者があった。高齢者が大半を占めたが，将来今より低下した認知能力や体力では増え続ける家財道具に対応できなくなり，万一大量の遺品を残した場合，家族にどのような負担が生じるか実感されたと思われる。また，開催後，複数の自治体関係者からの問い合わせと同テーマの学習会等の開催要請があったという。フォーラム参加者の多さとともに，この問題への関心の高さが感じられた。

2.3.3　ストックとフローの両面からの働きかけ

さて，ストックごみは，図1で示したとおり本人および家族死亡時に限らず，人生のさまざまな転機での放出が想定される。2016（平成28）年度事業では「赤ちゃんからのエコロジー」等，乳幼児の子育て世代を対象にした講座も催した（全3回）。子どもが生まれることも人生の大きな転機であり，生活は一変する。乳幼児のいる世帯での整理収納の考え方や，長くつきあえるおもちゃ・ゲーム等をテーマにした。ただ，これまでのところ図1に示した「さまざまな転機」に対して体系的かつ網羅的な取り組みができているわけではない。

図1の左側には，「日常のくらし」のさまざまな場面を示している。家の中に将来的にごみとなるものをストックしないためには，ライフスタイルへの働きかけが重要であることはいうまでもない。捨てることに抵抗を感じない暮らしをしていれば，ストックごみは蓄積されない。しかしそれが，多くのモノを消費し，日常的に大量のごみを出すライフスタイルであれば，私たちが求めているものではない。少ないモノで豊かに暮らす，そのようなライフスタイルの普及にごみ減は取り組んでいる。

事業としてはさまざまなものがあるが，2016（平成28）年度から取り組んでいる事業の中に「リーフ茶の普及で，ペットボトルを減らそうキャンペーン」がある。ペットボトルのような容器包装ごみは，ストックごみに対するフローごみといえる。既述の「できるだけ捨てない整理収納」に関する一連の活動は，ストックごみの蓄積防止と排出時のリユース可能性を追求したものだが，日常生活でのフローごみの発生抑制と合わせて，この両面からの市民啓発を続けている。

2.4　商品選択時の環境配慮

2.4.1　共通して重要な「ハッピーチョイス」

ストックごみの蓄積防止とフローごみの発生抑制は，一見隔たりのある活動のようだが，共通するものもある。本稿の前半部の「問題の把握に努める」で，ストックごみの候補として，「家財道具や電化製品の他，衣料品，紙資料や書籍の蓄積をあげる意見が多く出た」ことを紹介した。電化製品の中でも特定家庭用機器再商品化法（家電リサイクル法）の対象になっていない小型家電等がストックごみになりやすい。このように考えていくと，ストックごみといっても大型の家具や耐久消費材ばかりではなく，日常の買い物で選択する細々としたものが多く含まれると考えることができる。実際に「できるだけ捨てない整理収納事例づくり」で，モニター宅から出た不要品を見ても，こういった傾向がみられる（図2参照）。

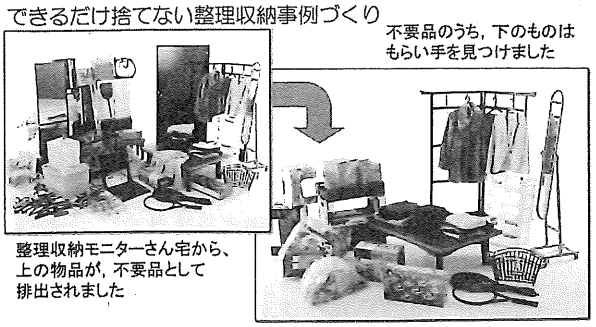

図2「できるだけ捨てない整理収納事例づくり」で，モニター宅から出た不要品

このことから，暮らしに必要な商品の選択時に，対象商品の耐久性や材質，生産時，廃棄後の環境影響を考慮することが，ストックごみの蓄積防止にも，フローごみの発生抑制にも共通して重要となる。商品選択時の環境配慮をグリーン購入というが，森下氏はこの後の項でこれを「ハッピーチョイス」と表現している。企業や自治体に「グリーン購入」という言葉や考え方が広まったが，一般向けには「ハッピーチョイス」という表現の方が親しみやすいと思われる。

2.4.2　フローごみ抑制の経験をストックごみに

先に紹介した「リーフ茶の普及で，ペットボトルを減らそうキャンペーン」は，空きペットボトルの分別リサイクルの推奨ではなく，茶葉から茶を淹れることの文化的意味や豊かさの再確認を通じて，ペットボトル緑茶に頼った暮らしの見直しを提案している。あからさまに「環境」を前に出すのではなく，より上質な暮らしの提案によるペットボトルごみの発生抑制を目的としている。こういったライフスタイルの見直しを通じて，商品選択を自然な形で環境配慮に導く手法は，ストックごみになりうる商品等の環境配慮型選択を広めるうえでも共通して活用できるのではないかと思う。

（リーフ茶キャンペーンサイト：http://kyoto-leaftea.net/）

もう一つ，ごみ減の2016（平成28）年度事業のうち，今後ストックごみ対策に有効と思われる事業として「2Rモデル実施事業・コミュニティガーデン調査」があ

る。この事業では，京都市内で自発的にコミュニティガーデンを営むグループをヒアリングし，食用作物の栽培や自家利用によって，食品ごみだけでなく紙ごみや容器包装ごみ等，他のごみの削減にも関心が広がるのか調査をしている。

なぜ地域コミュニティに注目するかであるが，不要品が発生した場合，身近なコミュニティでのゆずりあいができれば，ストックごみの蓄積防止への大きな力になると考えられる。核家族化や自治会加入者の減少等，さまざまな要因で地域コミュニティが希薄になっている現状であるが，京都市内でのコミュニティガーデンのような新たなコミュニティ形成の動きが，こういった機能を担うものになっているか，今後調査内容を広げることでみえてくると思われる。

2.4.3　今後のごみ減の事業に注目を

本稿で2016（平成28）年度事業として紹介した「整理収納アドバイザー向け講座」や「リーフ茶の普及で，ペットボトルを減らそうキャンペーン」「コミュニティガーデン調査」は，今後も継続するもので，成果が出るのは少し先になる。ストックごみについては，適正処分やリユースの追求が話題になることが多く，発生抑制に着目した事業は少ないと思われる。今後のごみ減の事業の進展に注目していただきたい。

3. ごみ減との協働事業と暮らしデザイン研究所の取り組み

3.1　ごみ減との協働事業

3.1.1　ごみ減量と整理収納の目指す社会像

これより後の執筆は，NPO法人 暮らしデザイン研究所（以下，本会）の森下真紀が担当する。

2015（平成27）年の初夏，ごみ減の堀孝弘氏より，協働事業の提案があった。提案の中で，「整理収納の大切さや意義は理解するが，整理作業後の不要品の扱いが気になる」旨の発言があった。それは整理収納コンサルタントを務める私や私の仲間たちにとっても，共通の関心事であった。

また不要品の行き場さがしにとどまらず，不要品をできるだけ生み出さないライフスタイルの普及が必要である。そのためには，モノやサービスの選択が重要になる。それによって，環境に配慮した社会の実現に寄与できるのではないかと期待した。ごみ減量と整理収納は，分野は違っても目指すところを共有して活動を進めることができると感じた。

3.1.2　協働事業の内容

2015（平成27）年度，以下の事業をごみ減と協働で実施した。

整理収納に，“できるだけ捨てない”というコンセプトを盛り込んだ市民向けワークショップを「整理編」「収納編」「衣料編」の3回，12月から3月にかけて開催した。

企画の中で，これまでごみ減量のイベントに足を運ばなかった人たちに参加してもらい，ライフスタイルやモノを持つ基準について考えてもらうには，どのような設定がよいか考えた。選んだ会場は京都らしさを存分に活かした京町家（中京区・ちおん舎）だった。今でも日本人の感性に添い，日々の暮らしの憧れの象徴でもある京町家を会場にして，20〜70代の幅広い世代の市民に参加してもらうことができた。各回定員を越える応募があり，好評のうちに3回を終了した。

合わせて，不要品を“できるだけ捨てない”ための「事例づくり」を，モニターを募集して実施した。この事業は，整理収納作業によってモニター宅から出た不要品をごみにしないため，どのような手立てや留意点があるか実際に取り組み，市民向けの情報として整理するというものである。

あと一つ，ごみ減がKBS京都と共同制作したラジオ番組「コンパクトライフで，ごみ減量」に同年11月17日（火）出演し，整理収納の基本的な考えと，ごみ減との協働事業の紹介をした。

事例づくりにご協力いただいたモニターやラジオ番組への出演を通して，日常のごみとは違う「ストックごみ」を対象とした整理収納への関心の高さを感じた。

各事業の詳細は，堀氏の報告の中に，ごみ減ウェブサイトでの報告記事のURLが掲載されているので，そちらを見てもらいたい。

3.1.3　整理収納の基本

ここで整理収納の基本的な考え方と手順について紹介する。

清掃と混同される方もいる片づけ，整理収納だが，その手順は，①目的設定，②整理，③収納，④習慣化の4つの段階に分けられる。

「どのような暮らしがしたいのか？」という目標を明確にし，それを作業の対象となる一つひとつのモノに反映させてゆく（①）。②の不必要なモノを取り除く整理の段階において，モノを持つ基準が明確になれば，片づけの8割は終えたともいえる（図3）。

しかし，多くの人はこの整理でつまずくため，ワークショップでは“できるだけ捨てない”ための収納（③）の工夫を提案した。こうした場合は，モノに付随するさまざまな要素のうち，使用頻度を基準として収納スペースを考えるようにする。長時間過ごす居室や寝室には使

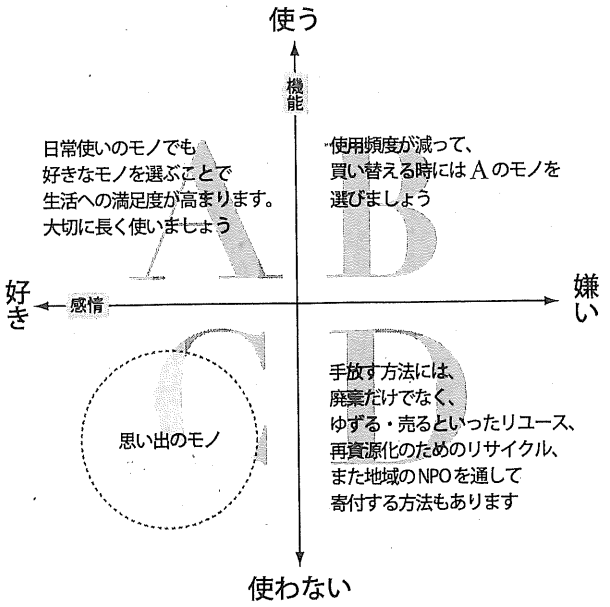

図3　初めての人でも取り組みやすい整理の方法。機能と感情の2つの要素を意識して分ける

用頻度の高いモノを配置し，年に数回しか使わないモノやストック品，思い出のモノといった使用頻度の低いモノ，所有していることが心の安定に繋がるモノについては，クローゼットの枕棚（上部の棚）や屋根裏収納等に収める。これらの定位置が決まると，ようやく日常で使ったモノを元に戻す④の習慣化に進む。

幅広い年齢層を対象にしたワークショップだったが，やはり超高齢社会を反映してか，高齢世帯の片づけに対する困りごとや相談を度々耳にした。私が整理収納を仕事にするようになって10年が経つが，こうした高齢期のストックごみについては，子ども世代と思われる40代，50代のご家族からこれまでも頻繁に相談を受けてきた。そこで，3.2では，高齢者を取りまく背景について本会の考えを述べる。

3.2　整理収納と高齢化社会

3.2.1　高齢期の心身の変化と社会背景

壮健な時期を経て，高齢期に移ると心身ともに変化が訪れる。若い頃には苦もなくできたことが，徐々にできなくなってゆく。日常においては，パッケージに印字された文字が見えないという視覚的な変化や，手先が不器用になりダンボールが開けられない，足腰の老化により重い物が持てないなど，モノと関係するさまざまな場面での不自由が発生するようになる。これにより，日常生活における家庭ごみの廃棄の場面においても，収集場所まで運ぶことができないなどの問題も出てくる。

高齢期のモノと人の間にある問題の背景には，社会，地域，家庭という3つの場面がある。

高度消費社会や個人主義，核家族化や，総人口に占める高齢者の割合が26.7％[1)]にのぼる超高齢化等，さまざまな要因を背景に，地域においてはコミュニティの希薄化といった問題が生まれている。高度成長期前にみられた調味料の貸し借りといった物品の共有に代わって個々の家庭における多くのモノの所有が進んだことが，前述のように高齢世帯や独居の増加と合わせて，日常の家庭ごみの廃棄困難やストックごみの増加（蓄積）につながっている。

また公的支援である介護保険では，使用しなくなったモノを廃棄するという「整理」の作業は対象外となっていることも，モノがリユースではなく遺品ごみとして廃棄される原因の一つになっている。

3.2.2　暮らしデザイン研究所が考える整理収納のステージ

そこで，平均寿命とともに延伸する高齢期の期間を，本会では以下の3つのステージに分け，モノと人の関係性における整理収納の段階を考えている。

［ステージ1］
55～64歳…心身ともに元気な時期。この時期にモノの整理を進めて欲しい

［ステージ2］
65～71歳…心身の衰えに対して，収納のテクニックを用いた自立支援を必要とする時期

［ステージ3］
72歳以降…認知機能にも衰えがみられ，家庭に支援者が入ることを見据えた収納が求められる時期

現在の社会制度においては，高齢者を65歳以上と定義している。暮らしデザイン研究所では65歳に達するまでの10年間をステージ1と捉え，この間のモノの整理を推奨している。

次に，ステージ2は，社会的に高齢者と呼ばれる年代だが，心身とも健康に過ごせる健康寿命を伸ばすことが大切である。高齢になると，室内で足元の紙に気づかず滑るなどして転倒したことが引き金となり，加齢による骨密度の低さで骨折しやすくなる。この治療の期間に食欲の低下や筋力の低下，物忘れ等につながるケースが多く，歩行も不安定となり活動が制限された生活を繰り返すことによって寝たきりへと進行する。このような生活不活発病（廃用症候群）† の発症を防ぐため，安心・安全を優先した収納に配慮する時期になる。

† ニュースでは災害時の仮設住宅での活動が制限された生活により引き起こされる疾患としても取りあげられている。旧来は介護の場面で廃用症候群といわれてきたが，廃用という言葉を避けるため，現在では生活不活発病と表記される場面が増えている

ステージ3では，認知機能にも衰えがみられるようになり，介護保険の利用も見据え，誰もがわかりやすいラベリング収納等の工夫が必要になる。

このように，高齢期に差しかかる50代でモノの整理に取り組むことで，第二の人生に向かう心構えを育み，一つひとつのモノと対峙することで自己理解を深め，次のステージに向けて本当に必要なモノを選び取る力を養うことになる。ワークショップでは「本当に必要なモノを選び取る力」の中で，環境に配慮した商品の選択を「ハッピーチョイス！」と紹介した。この場合の「環境」には，生産時，廃棄時の環境影響，特に発展途上国で生産される物品の場合は，生産者の人権への配慮も含めて考えている。

3.2.3　高齢期のストックごみは「寄付」でリユース

こうした高齢者を取りまく背景を，遺品ごみの減少からリユースへと転換させるため，暮らしデザイン研究所では「モノの寄付」を提案している。

寄付への関心は年齢とともに高まる傾向がある。「寄付白書2013」（NPO法人 日本ファンドレイジング協会発行）によると，寄付者割合は20代では約16％とわずかだが，50代では約48％とほぼ半数となり，70代では約67％に増加していることから，加齢による社会貢献への意識の高まりを読みとることができる。

人は，その人生の中でさまざまなモノと出会い，多くのモノとの別れを通して，自分に必要なモノとそうでないモノの基準を身につけていく。そして同時に，その豊かな人生経験から，自分や家族の幸福の追求に留まらず，広い社会への貢献へと関心を高めていくことができる。

そうした意欲を行動に移すことがより簡便にできるよう，社会での受入体制を整えてゆくことでストックごみが活かされ，さらには，地域社会における多世代間でのモノと人との交流に繋がることが望ましいのではないだろうか。

参考文献

1）内閣府：平成28年度版高齢社会白書（2016）
http：//www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/28pdf_index.html（閲覧日 2017年3月31日）

Local Initiatives Targeting Reduction of Stocked Waste

Takahiro Hori* and Maki Morishita**

* Waste Reduction Promotion Conference of Kyoto
** Institute for Non Profit Organization Life Design

† Correspondence should be addressed to Takahiro Hori:
Waste Reduction Promotion Conference of Kyoto
(Miyako Ecology Center, 13 Fukakusa-Ikenouchicho, Fushimi-ku, Kyoto 612-0031 Japan)

Abstract

At the Waste Reduction Promotion Conference of Kyoto, the term "stocked waste" was defined as "potential waste accumulated in households", which may have to be discharged in the future triggered by some circumstance or event. Members of the Waste Reduction Promotion Conference of Kyoto conducted surveys and discussed what has the potential to become "stocked waste" and under what circumstances is it finally discharged into the waste stream. Not only large furniture pieces and electrical items, but also small household appliances, clothes, and books may become "stocked waste". These tend to be discharged at various points in someone's lifetime, not only upon the death of the owner. Members came to the realization that taking measures and raising awareness to prevent accumulation of "stocked waste" is crucial, along with the promotion of reuse and appropriate treatment at the point of discharge.

This paper describes the activities of the Waste Reduction Promotion Conference of Kyoto and the Institute for Non Profit Organization Life Design, which have been collaborating since 2015 on the theme "Organization and storage aimed at throwing away as little as possible". We've also worked on the implications involved in working to create changes in the mental and physical conditions of elderly people.

Keywords: stocked waste, waste prevention, reuse, organization and storage, changing mental and physical conditions of elderly people